大谷學報　第十七卷　第一號

聖書と英語

杉平顕智

1

聖書ほど近代英語の上に大きな影響を及ぼしてゐるものはない。

シェークスピアの作品の貢獻してゐる所が可成是に近いが、夫は主として文語の上の事であるに反し、聖書の影響は日常用語に迄及んで、近代英語一般の上に深い痕跡を殘してゐる。

聖書の全譯は十四世紀に於けるウィックリフの翻譯以來十數種に及んでゐるが、是等の中ヂェムズ一世の命に依り、千六百十一年に現はれた欽定英譯聖書(Authorised Version)が最も傑出してゐる。この聖書の英語が簡潔で威嚴があり、リズミカルである事、又この聖書が英文學上に於ける一大傑作である事は何人も認むる處である。

かゝる名譯が「萬人の書」として、教會に、家庭に、日常讀まれた結果、その單語、熟語、比喩、文體が續々と英語の中に流入して表現力を豐富ならしめ、雄健簡素な文體を生ぜしむるに至つたのである。

以下に聖書に由來する言葉で近代英語に於て普通に用ひられてゐるものを若干あげて見やう。

2

聖書に出て來る人名で現今普通名詞の如く用ひられてゐる者は可成多い。イズラエルの賢王で、詩篇、箴言の作者である Solomon は「賢者」であり主人の妻の誘惑を斥けた Joseph は「純潔者」である。是等は精神的特質から意味を得たものであるが、肉體的特質から意味を得たものには「巨人」Goliath「大力士」Samson 九百六十九歲迄生きた「長命者」Methuselah がある。

其の行爲から普通名詞化したものもある。弟アベルを殺した Cain は「兄弟殺し」、ユダヤ民族の始祖 Abraham は「開拓者」、野に放たれた Ishmael は「浮浪人」、嘆き

の豫言者 Jeremiah は「愁嘆者」、十二使徒の一人で疑深い Thomas は「懷疑的人物」の代表である。「激しい駁者」を Jehn と呼び、「宗教にも政治にも熱を持たぬ者」を Laodicean といひ、他人の事に干渉する事を好まぬものを Gallio といふのも共に聖書から來てゐる。

其の境遇より現在の意味を得てゐる者もある。Adam は「人類の始祖」であり又「裸體の人」でもある。貧窮のドン底に落ちても尙ほ神を疑はなかつた Job は「窮乏」の代表であり、神命に背いて航海し暴風雨に遭つた Jonah は「不運を齎すもの」の標本である。其他 Benjamin は「最愛の末子」、Melchizedech は孤兒、Dives and Lazarous は「富者と貧者」である。

Adam's profession—アダムの職業は—農業或は園藝を意味し、brand of Cain—カインの烙印—はカインが神からうけた烙印に依つて「殺人の罪を犯せる事」を表はし Benjamin's mess—ベンジャミンの皿—は最愛の子ベンジャミンの「大いなる分前」を示してゐる。as salt as Lot's wife といふ奇妙な比喩は、神火に燃ゆる邪惡の町ソドムを神命に背いて顧み鹽の柱となつたロットの妻に其の起源を有し、ヨブの苦難の中に來つて徒らに論議して彼を苦しめたその三人の友人は「益なき慰めをなすもの」Job's comforterer として今に殘つてゐる。「他人に羨まれる所有物」は Naboth's vineyard として列王紀略上に見える Naboth の葡萄園と同じく考へられ、「僞りの起請」は Judas' kiss としてマタイ傳に表はれるユダの行爲と等しとせられてゐる。

人名と共に多くの地名も亦普通名詞化してゐる。アダム、イヴが知慧の菓を食せざりし以前に住んでゐた Eden は「樂園」であると共に亦「美しき景色の場所」にも用ひられ、神がアブラハムに與へんと豫て約束せる Cannan の土地は land of promise として共に「天國」或は「幸多き國」を表はしてゐる。バビロンの人々が天に昇らんが爲に企畫し、神の怒を招きつひに言語の分立と人類の分散とを來したと傳へらる Babel の高塔は「空想的計畫」を意味し又「囂々たる光景」をも意味する。又 Sodom 及び Gomorrah は「邪惡の町」の代表である。其他ジョウゼフがイズラエル人を住まはしめた Goshen は「光明鄕」であり、パレスチナの端より端 From Dan to Beersheba は「端から端迄」といふ意味に用ひられる。

植物の名前で聖書の固有名詞に關係あるものがある。Aaron's beard, Aaron's rod, Jacob's ladder, Job's tears, Joseph's coat, Juda's tree, Solomon's seal 等此例である。

3

聖書に由來する言葉は聖書の歴史的事件に基因するものが多いが、其中固有名詞に因む者は前に述べた。固有名詞を伴はぬ者を次に若干あげて見やう。

「神の奇蹟」と呼ぶべきものが、人の注意を惹いて、種々に轉用せられてゐるのが見受けられる。モーゼがイズラエルの人々を伴つてエヂプトを逃れパレスチナの地に來た時、エホヴの神は晝は雲の柱、夜は火の柱となつて彼等を導いたと出埃及記にあるが、pillar of cloud, pillar of fire が「指導者」「案内者」の意味に用ひられるのは、この事に基くのである。又夫と同じ時、彼等が曠野にさまよつて餓に迫つた時、神が彼等に與へた食物を manna と呼ぶが是は現今「精神的食物」の意味に用ひられてゐる。widow's cruse「寡婦の瓶」が「無盡藏の供給」を意味するのも聖書から來てゐる。豫言者エリヤが神の命に依りザレバテの寡婦より養はれたる時一桶の粉の用ひても用ひても盡きなかつた事から來てゐる。still small voice が「良心のさゝやき」の意味に用ひられるのも聖書から來たもので神がホレブの山の上に於て同じ豫言者エリアに風と地震との後、靜なる細微き聲に於てあらはれた事に由來する。パウロは始め基督教を迫害したため目が見えなくなつたが、アナニヤといふ者が神の命に依りて彼の上に手をおきて神の言葉を傳へたために彼の目から鱗の如きもの落ちて見る事を得たといふ故事がある。こゝから the scales fall from one's eyes といふ言葉が「何かに目が開ける」意味に用ひられる。其他 tree of life, tree of knowledge, forbidden fruit なども夫々種々の意義に轉用せられてゐる。

ユダヤの法律の一奇現象として逃遁邑 city of refuge といふのがある。誤つて人を殺した者が安全に保護される六つの邑をいふのであるが、是が一般逃亡者が安全に身を隱し得る場所に轉用せられてゐる。the ark of covenant は神が自らその上に律法を書かれて、モーゼにシナイの山上に於いて授けられた、二枚の石の板を含む契約の櫃であるが是は「最も神聖なる者」といふ意味にもなるが又イエス、キリストの出現に依り神と新なる契約が生じたため「既成宗教」の意味に用ひられる。shibboleth「御國訛り」「合言葉」はもとギレアデとエフレイムと戰へる際ギレアデ人がエフレイムの逃亡者をためすために發音させた言葉である。

figleaf「不體裁を覆ふもの」は創世紀三章七節アダム・イ

ヴの行爲に、the mess of pottage「高價についたもの」は同じく創世紀廿五章卅四節エソウの輕舉に、the death in the pot「隱れたる危害」は列王紀略下四章四十節に the parting of the way「岐路」はエゼキエル書廿一章廿一節エゼキエルのイエルサレムに對する豫言に、foot of clay「不確實なる基礎」ダニエル書二章卅一節以下のネブカデネザルの夢に基いてゐる。

アロンがエホヴの代りに神として崇める爲に作つた golden calf は mammon と共に財神となり、フェニキア人の神 Baal フィリスチン人の神 Dagon スリヤ人の神 Rimon は皆共に偶像の象徴とせられてゐる。カナン人の神 Molech には子供を犧牲としてさゝげる習慣があるがために不自然なる犧牲の要求せるゝ仕事に喩へられ、海の怪物 Leviathan は大船、大力の人等に比べられる。

4

ヘブライ人の傳說、風俗、習慣から來た言葉もある。

先づヘブライ人の定命は七十歲 three score and ten である。詩篇九十篇に「我等が年をふる日は七十歲にすぎず、あるひは壯かにして八十歲にいたらん、されどその誇るところはたゞ勤勞とかなしみとのみ、その去りゆく事速かにして我等もまた飛び去れり」とある。從つて three score and ten は西洋に於ける「人間の定命」であり「一生」である。

病氣及び其他の災難は神の人間に下す懲罰だと考へられてゐる。出埃及記廿章に云ふ。「我エホヴ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者に向ひては父の罪を子にむくひて三四代に及ぼし、我を愛しわが誡命を守る者には恩惠をほどこして千代に至るなり。」從つて the Providential visitation は天惠、天罰の意味に用ひられて疫癘の流行、地震の襲來等もエホヴの復讐に外ならずとせられる。

イズラエル人の靈魂は to give up ghost 靈を發す「死す」といふ言葉に表はれる。靈魂は死ぬ際に身體を離れる者だと考へられてゐる。

人は死ぬ前に家を片附ける事が習慣である。從つて家を片附ける事 to set one's house in order は「遺言する」といふ意味に於て用ひられる。

「或人からの遺產を豫期する」といふ意味での to wait for the dead man's shoes といふ言葉もヘブライズムである。ルツ記四章に「昔イズラエルにて物を贖ひ或は交易んとする事につきて萬事を定めたる慣例は斯の如し、卽ち此人靴を脫ぎて彼人にわたせり、是イズラエルの中の

證なりき。」

「衣を裂き土を被る」事「衣を裂き麻布を纏ひ灰を被る」事は何れも悲哀悔恨を示す象徴であるからして in dust and ashes, in sackcloth and ashes は何れもかゝる意味に於て用ひられる。

「或事から足を洗ふ」「手を退く」といふ意味の to wash one's hand of something といふ表現もヘブライの習慣に起源してゐる。申命記廿一章に云ふ。「若し人殺されて野に仆れをるあらんに……その人の殺され居りし處に最も近き邑の長老等、其谷にて頸を折りたる牝牛の上に於て手を洗ひ答へていふべし、我等の手はこの血を流さず我等の目は是を見ざりしなり。」

to cast a first stone「或人の行爲に最初の批難を投げる事」もイエスの「汝等の中罪なき者先づ石を擲て」といふ言葉と共に有名となつてゐるが是もヘブライの慣習に基いてゐる。申命記十七章にいふ。「斯る者を殺すには證人まづその手を是に加へ、然る後に民みなその手を加ふべし、汝かく惡事を汝らの中より除くべし。」

5

四福音書の中には巧なる比喩が豐富に見出される。

mote and beam に於ては氣づかれたる他人の小過は微塵に、氣づかれざる自己の大過は梁木に喩へられる。廣き道 broad way は滅亡の大道であり、狹き門 strait gate は幸福に入る道である。

然し乍ら是等の比喩の多くは、原典に於けるよりも概して廣き意味に用ひらる。salt of the earth は單にキリストの弟子のみでなく、一般に社會に清純なる影響を與ふる人々に轉用せられ、a grain of mustard seed は天國の喩に用ひられたものであるが今は「大なる發展をなすべきものの小なる始まり」を意味してゐる。

new wine in old bottles は古き形式の中に盛る事の出來ぬ新しき內容であり、the prodigal son は歸れる漂浪者の意味に用ひられる。good Samaritan は困窮せる者を救ふ人であり widow's mite は貧者の一燈である。

to cast pearls before swine 豚に眞珠。

No man serve two masters 何人も二人の主に仕ふるを得ず。

The blind leads the blind 一盲群盲を導く。

A prophet is not without honour save in his own country 豫言者は鄉里に容れられず。

等の如く諺となつてゐる者も可成多い。

6

ヘブライ文法の特殊形式で多くの類句の原型となつたものに holy of holies がある。ヘブライ語の superlative を表はす此句は heart of hearts, the place of all places, the evil of evils, a horror of horrors, a modern of the moderns 等の如き多くの類句を英語に生ぜしめた。

ヘブライ語の用語上の特色である譬喩語も多くの常用句を英語に與へてゐる。自然に因むものには

on the wings of wind 最大の速力を以て

valley of shadow of death 禍害

等。動植物に基くものには

olive branch 子孫

gall and wormwood 不快なる事柄

等。農業に關するものには

to live on the fat of the land

榮耀を極める

to sow wind and reap whirlwind

輕卒なる行により大なる禍を招く

等。身體に關するものには

apple of the eye 掌中の玉

in the sweat of one's brow

額に汗して

等。數多くの例がある。

7

聖書に由來する語句で誤譯に基くものがある。ヘブライ語に於ては單に「益なきもの」といふ意味にすぎなかつた Belial は、希臘語聖書に於て固有名詞として扱はれ、從つてラテン語聖書、英語聖書に於ても原形のまゝ用ひられ、且つ又ミルトンの「失樂園」に於て惡魔の一眷屬を表はすに用ひられたため、ついに惡魔の名稱となるに至つた。

反之、或惡魔の名 Azazel は scapegoat と義譯せられて「身代り」の意味を生じた。利未記十六章八節に、「その兩隻の山羊のために籤を掣くべし卽ち一の籤をエホヴのためにし一つの籤をアザゼルのためにすべし乃至又アザゼルの籤にあたりし山羊はこれをエホヴの前に生しおきこれをもて贖罪をなしこれを野に送りてアザゼルにいたらすべし。」民衆の罪を負へる山羊の送らるゝ荒野の惡魔は贖罪の山羊と誤解せられた。聖書の英譯者は、この scapegoat（のがれの山羊）が azazel の字義譯である

と信じたのである。

to have the iron enter into one's soul といふ句も「くろかねの鏈をもてその靈魂をつなげり」といふ句の誤譯から生じた。明晰ならざる文法と聯想を異にする語彙とに迷つた譯者の苦心が偲ばれる。然し此句の面白さと祈禱書の流行とは此の不可解の句に「悲哀に沈む」といふ意味を與へた。

誤植が慣用句を生じた例は to strain at に見られる。此句は「蚋を漉し出し (to strain out) ながら駱駝を呑む」が如き僞善者に對する批判の言葉 ye blind guides which strain at a gnat and swallow a camel に基く。勿論 strain at は strain out の誤植であるがこの誤植は英語に一表現を加へて to strain at a thing といふ慣用句を産むに至つた。

8

聖書の英語に及ぼせる影響はたゞ熟語成句を與へた事のみに止まらない。その故事は直接に間接に言及され、その語句は何等出據を示す事なく引用せられ、その文體は意識的に無意識的に模倣せられる。

作家に依つては英譯聖書の文體を變調であるとして斥ける人もあるが、近代英語散文の發達の上から見ると英譯聖書の文體の寄與は可成大きい。語彙の上でラテン系の言葉を多く用ひ、文章の構造の上では多くの概念を一つに織り込んでゆく複雜な綜合的なジョンソン流の文體に對し、語彙の上ではアングロサクソン系の語を多く用ひ、文章の構造の上では單純で分析的な文體が聖書流の文體である。

ジョンソン流の人工的な散文は文體に多樣性と整正の美とを與へはするが他面虛飾誇張に陷いる弊がある。聖書風の自然な文體は時には冗漫に流れる憾みがあるけれども崇高なる單純さと明晰なる躍如性とを兼ね具へてゐる。英語の文體はこの二つのものの交錯の中に發達して來た。

十六世紀以來の英國作家は皆何等かの意味に於て聖書の影響を蒙つた。その著しい例は十七世紀の Bunyan である。鍛冶屋の子として生れ、僅かな學校教育を受けたにすぎぬ彼は殆んど聖書だけを愛讀して、あの立派な「天路歷程」を我々に殘した。十八世紀古典主義の時代に於ては古典作家を範とするジョンソン流の散文が流行してゐたが、夫でも尙聖書の大きな影響は Pope, Cowper, Burke 等に認められる。十九世紀浪漫主義の時代に入る

とアングロサクソン系統の言葉と自然の表現とを好む傾向が起つて、詩人 Coleridge, Wordsworth, Byron, Scott, Tennyson, Browning, 散文作家 Carlyle, Ruskin, Arnold, Butler, Wilde, Shaw, A. Huxley 等に聖書流の言語文體が榮えた。

9

文體の價値は又内容の上から考へられる。ジョンソン流の文體は整正の美しさを理想とする希臘精神の發露であり、聖書風の文體は靈性の響を傳へるヘブライ精神の顯現である。これ等二つの精神を夫々代表する古典文學と聖書文學とは共に世界文學の一つとして數へられる。

聖書の諸篇の中で、文學上の意味から殊に多く讀まれ、從つて英語の上に特に大きな影響を及ぼして居るものは、舊約に於ては、「創世記」「出埃及記」「ルッ記」「エステル書」「詩篇」「箴言」「傳道之書」「ヨブ記」豫言書の一部であり、新約に於ては「默示錄」である。

又此等の中、ヨブの苦難を述べる「ヨブ記」は聖書の中の最も雄大なる篇であり、魂の明闇を語る「傳道之書」は人生其者に對する普遍の眞理を包攝し、天啓を表はす「默示錄」はその行文の響と美とその畏るべき幻想とに依つて讀者の心耳を强烈に動かす。カーライル、ラスキン、テニソンの如きはいづれも此の「默示錄」から大いなる影響をうけたと自ら語つてゐる。

此等三書の影響は最も大きい。

10

以上に於て聖書の英語に及ぼした影響の一端を述べた。上述以外の數多くの聖書的單語熟語、及びそれらの轉用、故事の言及、文句の引用、文體の發展等についての詳說、英語の文語口語の組織の中にこれらの要素がいかに表はれてゐるかを多くの實例に徵して見てゆく事は專門的な興味に屬する。此處ではたゞ聖書の英語に及ぼした影響がいかに大きいものであるかといふ事を示唆するだけに止めたいと思ふ。(了)